

SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

孤狼の血 LEVEL 2

2021 年 / 日本映画
配給：東映 / 139 分

2021 (令和3) 年 8 月 22 日鑑賞

梅田ブルク7

Data

監督：白石和彌
脚本：池上純哉
原作：柚月裕子
出演：松坂桃李 / 鈴木亮平 / 村上虹
郎 / 西野七瀬 / 音尾琢真 /
早乙女太一 / 洪川清彦 / 毎
熊克哉 / 笈美和子 / 青柳翔
／ 斎藤工 / 中村梅雀 / 滝藤
賢一 / 矢島健一 / 三宅弘城
／ 宮崎美子 / 寺島進 / 宇梶
剛士 / かたせ梨乃 / 中村獅
童 / 吉田鋼太郎 / 小栗基裕

👁️👁️ みどころ

松坂桃李演じる“ヒロダイ君”こと広島県警の日岡は、大上先輩亡き後、どんな巡査に成長？他方、3年間のムシヨ生活を模範囚で終えた(?)、鈴木亮平演ずる上林の“悪の化身”ぶりは？

『孤狼の血 LEVEL 2』を、原作にはない上林を登場させたオリジナル・ストーリーにしたのは一体なぜ？巡査のくせに日岡がベンツを乗り回し、ヤクザ勢力の均衡の上に“我が世の春”を謳歌しているのは一体なぜ？「わしゃ必ずそのデカ見つけ出して、地獄見せちやるけえ」vs「口答えしょーんは、全員ブタ箱叩きこんじゃる」のセリフがピッタリの両雄のカーチェイスは？肉弾相撃つ衝突は？

近時の邦画には珍しく、“韓国ノワール”色漂うホンモノぶりをしっかり味わいたい。ここまでのレベルの完成度を見れば、『LEVEL 3』にも大いに期待！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■消えゆくヤクザ。その実態は？ヤクザ映画の秀作が！■

2021年8月20日付朝日新聞は、「耕論」・「オピニオン&フォーラム」欄一面に「消えゆくヤクザ」と題して、3人の“識者”の論考を紹介した。その問題意識は「暴力団対策法が成立して今年で30年。ピーク時で20万人近くいたとされる暴力団員は、3万人以下に減った。『ヤクザ』はこのまま消え去るのか。それは警察や社会の勝利なのか」だ。

その中で、『ヤクザと家族 The Family』（21年）（『シネマ48』160頁）等をプロデュースした河村光庸（映画プロデューサー）は、「不寛容な社会 格好の標的」と題して、「失敗や恥を受け入れ、やり直せる機会が与えられるか。ヤクザの存在を考えた時、そんな寛容さこそが、今の社会に求められているのではないかと思うのです。」とまとめている

が、これはあまりにもありきたり。他の2本も、いかにも朝日新聞的な「ありきたり」かつ「きれいごと」の内容だった。しかし、映画界では今、ヤクザを主人公にした秀作が次々と生まれている。『シネマ48』では、「暴対法」施行後のヤクザは？その新旧二態」と題して『すばらしき世界』（21年）『シネマ48』154頁）と『ヤクザと家族 The Family』を取り上げた。そして、私は両作品とも星5つと評価した。

他方、“老ヤクザの更生”をテーマにした『すばらしき世界』で主人公を演じた役所広司は今、ソニー損保のCMでガソリンスタンドの店員やガードマンなどの役をコミカルに演じているが、「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ。」というあつと驚くセリフがピッタリ板につく悪徳刑事・大上役を演じたヤクザ映画の秀作が『孤狼の血』（18年）（『シネマ42』33頁）だった。同作で大上刑事はバディとなった広島大学出の新米刑事・日岡秀一（松坂桃李）と共にハチャメチャな違法捜査もいとわずに大奮闘したが、志半ばにして死亡。しかし、大上は死して何を残したの？

私は同作の評論のラストの“見出し”を「次作の主演はヒロダイ君！その成長と変身に期待！」としたが、今それが「Part2」ではなく「Level2」として登場！近時、TVでは『極道の妻』シリーズが何度も放映されているが、かつての東映ではヤクザ映画が全盛を誇っていた。しかして、暴対法施行後30年の今、“消えゆくヤクザ”はホントにホント？映画では秀作ぞろいだが……。

■□■旧ソ連の保守派クーデター未遂からも30年！■□■

新型コロナウイルス騒動以降、私が生まれた日本国はますます“内向き志向”が強まると共に、太平洋戦争中の“自粛警察”や“隣組”による相互監視・密告体制が強まっている。さらに、「欲しがりません、勝つまでは」の思想までが蔓延している。そんな中で前述の暴対法施行30年が語られたが、目を世界に転ずれば、2021年は1991年8月19日に旧ソ連で起きた「保守派（守旧派）クーデター未遂」事件から30年になる。朝日新聞はそれをほとんど取り上げていないが、そんなニュースを大きく取り上げているのは日経新聞と読売新聞だ。ソ連邦は正式には「ソビエト社会主義共和国連邦」だが、1991年当時の「ゴルバチョフ書記長（大統領）」、「ペレストロイカ」、「エリツィン大統領」等のキーワードは知っていても、それが世界的にどれほど重要な事件だったのかを知る人は少ないだろう。それから30年経った今、あの「保守派クーデター未遂事件」をしっかりと検証したい。

他方、ヤクザ映画は刑務所からの出所シーンで始まるものが多いが、本作もそれと同じ。韓国ではそこで白い豆腐を食べるのが常だが、日本ではそんな習慣はなく、1991年（平成3年）に徳島刑務所を出所してきた上林成浩（鈴木亮平）は、子分たちから盛大なお迎えを受けることに。世話になった（？）刑務官・神原（青柳翔）に丁寧にあいさつする姿は『すばらしき世界』で観た主人公と同じだから、きっと上林も彼と同じように出所後はひたすら更生の道を……。そう思っていると、上林が最初に向かった報復の相手は、ピ

アノ教室を営む神原の妹・千晶（寛美和子）だったから、アレレ、アレレ。ストーリーは正反対の方向に。

それはそれとして楽しみたい（？）が、ここで30年前のソ連の「保守派クーデター未遂事件」と同じようにしっかり復習しておかなければならないのは、今から3年前の1988年（昭和63年）に広島県の呉原市（架空の地名）を舞台として繰り広げられたヤクザ抗争だ。本作でも冒頭に少しだけ写真とナレーションでそれが紹介されるが、『孤狼の血』では“ヒロダイ君”と冷やかされていた日岡秀一刑事（松坂桃李）の3年後は如何に？彼は、今は亡き大上刑事から警察上層部の不正が書かれた帳簿と狼の凶柄が印象的なライターを譲り受けていたが、その成長ぶりは？吉永小百合と共演した『いのちの停車場』（21年）では、いかにも今風の人の良い青年として「まほろば診療所」の運転手役を演じていた松坂桃李が、本作ではあっと驚く風貌と共に、大上先輩をはるかに凌ぐほどの“バケモノ刑事”に成長しているので、それに注目！

「東京2020」では内村航平の鉄棒での大失敗もあったが、伸び盛りの若いアスリートたちの成長と活躍が目立っていた。それらと比べても、日岡の成長はすごいものだが・・・。

■□■キネ旬が“国産ノワールの最新章”を特集！これは必読■□■

『キネマ旬報9月上旬号』は、「白石和彌氏／国産ノワールの最新章」と題して、冒頭の6～33ページにわたって本作を大特集した。その問題意識は次のとおりだ。すなわち、

平成最後の年。

日本映画における看板俳優を主演に掲げ、東映印を深く彫りこんだやくざ映画の復活に往年のファンは歓喜し、唸った。

大きすぎる存在は復活を祝福し、その死は同時に過去を清算し、次世代へと血を継ぐ象徴となろう。

あれから3年。

待望のシリーズ第二弾は、東映製作陣の導火線に火を点けた傑作の原作に敬意をもってオリジナルの物語に挑んだ。松坂桃李は、驚くほど役所広司の正当な継承者となった。

そして白石和彌は、日本を越え、また現代を超え、未来へとつながる

映画や映画作りを模索していると言えよう。

これを読めば、よほど力を入れ込んでいることが明らかだ。この特集では、出演者や監督インタビューも面白いが、とりわけ、①「やくざ映画は憤りと悲しみの時代に再生する」（伊藤彰彦）（21頁）、②「白石和彌 [監督] レジェンド、『仁義なき戦い』との決別」（轟夕起夫）（24頁）、③「止まるな白石、名匠にもなるなかれ」（塩田時敏）（30頁）、④「白石和彌、ノワールに懸ける本気度」（八幡橙）（32頁）は興味深い。これらは前述した朝日新聞の3本の論考より、よほど読みごたえがあるので、こりゃ必読！

■□■鈴木亮平がビッグに！体格も演技も高橋英樹越え！？■□■

私は『0からの風』（07年）（『シネマ15』214頁）の鑑賞を契機に塩屋俊監督と懇

意になり、以降『きみに届く声』（08年）（『シネマ21』188頁）、『ふたたび swing me again』（10年）（『シネマ25』92頁）、『種まく旅人～みのりの茶～』（11年）（『シネマ28』151頁）の製作に関与すると共に、彼が主催していた「塩屋俊アクターズクリニック」の忘年会などにも毎年参加していた。また、「HIKOBAE PROJECT」にも多額の出資をしていたが、彼は2013年6月5日、公演先の仙台市の楽屋で倒れ、そのまま56歳で死亡した。

他方、本作で上林役を演じた鈴木亮平は2006年から「塩屋俊アクターズクリニック」に所属し、塩屋俊の下で演技を学んだ俳優だ。彼の映画デビューは『椿三十郎』（07年）（『シネマ16』27頁）。そんな鈴木亮平を塩屋俊が満を持して主役に起用したのが、『ふたたび swing me again』だった。同作で見た俳優・鈴木亮平に私は大いに期待したが、その後、彼はなんと『HK 変態仮面』（13年）に“変態仮面”役で登場したから、ビックリ。これは一体何？なぜこんな脇役を？そう思っているうちに塩屋俊監督が他界したが、塩屋俊亡き後、彼は多くの映画やTVドラマに起用された。その出世作になったのは、2018年のNHK大河ドラマ『西郷どん』での主役起用だ。それに対して、映画ではこれといった出世作がなかったが、「わしゃ必ずそのデカ見つけ出して、地獄見せちやるけえ」、「ほんなら殺してくれんね？」等のセリフがいかにピッタリの“極悪ヤクザ”上林成浩役を演じた本作は、彼の出世作になるはずだ。

考えてみれば、私が高校生の頃に毎週観ていた日活の青春映画では、吉永小百合 vs 浜田光夫、和泉雅子 vs 山内賢、松原智恵子 vs 渡哲也等のコンビが大人気だった。そんな中、体格がよく、ハンサムなのになぜかいい役に恵まれなかったのが、高橋英樹だった。『青い山脈』（63年）での彼の姿を見れば、そのみじめさが明らかだ。しかし、彼はその体格を生かした『男の紋章』（63年）での着流し姿がいかにピッタリだったため、『男の紋章』シリーズが彼の出世作になった。その結果、それまで圧倒的に差をつけられていた浜田光夫が1966年の暴行事件による目の大怪我のために急失速したのに対し、高橋英樹は急成長していった。そう考えると、「上林成浩の存在感なしには本作は成り立たない！」とまで言われている本作が、俳優・鈴木亮平の出世作になること間違いなし！

■**■** 泉警とヤクザの関係は？敵の敵は味方！その鉄則は？**■** ■

去る8月15日、アフガニスタンの首都カブールがタリバンの手によって陥落した。その後、カブールの空港から国外に脱出しようとする群衆の姿を映したニュース映像は全世界にショックを与えた。トランプ前大統領とバイデン現大統領はその責任を巡って“サヤ当て”を演じているが、アフガニスタンの“新政権構想”をめぐる米英と中ソを軸とする“せめぎ合い”は如何に？

戦争をめぐるのは、「敵の敵は味方」が鉄則だが、暴対法施行30年を迎えた今の日本でも、警察とヤクザを巡っては、「敵の敵は味方」の鉄則がまかり通っているの？警察のマフィアへの潜入を描いた傑作は『インファナル・アフエア』（02年）（『シネマ3』79頁）、

『インファナル・アフェア 無間序曲』(03年)、『シネマ5』336頁)、『インファナル・アフェアⅢ 終極無間』(03年)、『シネマ17』48頁)だが、同じテーマの傑作は韓国ノワールに多い。秦の始皇帝の時代から権謀術策の限りを尽くした抗争を何千年も繰り返してきた中国がその点に長けているのは当然だし、中国と日本との板挟みで長年苦しんできた韓国でもそれは同じ。しかし、そもそも、同一民族で、騙し合いが苦手な日本人は、「敵の敵は味方」の理解に疎い。

その点について私は、『孤狼の血』の評論で「中東も朝鮮半島も本作の抗争と同じ?」という見出しで書いた。しかして、3年前の暴力団抗争の「手打ち」を裏で仕切り、表向き抗争を終わらせた日岡は今、階級こそ巡査のままながら、殉職した先輩刑事・大上に代わって暴力団組織と繋がりを持ちながら、目的のためには違法な捜査方法もいとわず、広島「治安」を守っていた。そんな日岡にとっては、綿船組組長兼仁正会会長・綿船陽三(吉田鋼太郎)率いる仁正会と、前作で殺された初代会長・五十子正平(石橋蓮司)の後を継いだ2代目五十子会会長・角谷洋二(寺島進)率いる五十子会が、ヤクザビジネスで仲良く共存していくことが不可欠。つまり、そんなバランスの中でこそ、広島県警の巡査・日岡の役割が果たせるというものだ。日岡はそのバランスを保つため、恋仲(?)である「スタンド華」のママ・近田真緒(西野七瀬)の弟・幸太(村上虹郎)を“スパイ”として巧みに使っていたが……。

平成3年の広島呉原市のヤクザ社会はそんな微妙な均衡の上に成り立っていたが、今、五十子会の組員だった上林が刑務所からシャバに戻ってくる?

■□■原作は?物語も上林もあえてオリジナル!それはなぜ?■□■

前作『孤狼の血』の原作は柚月裕子が書いた小説『孤狼の血』。このシリーズは、①『孤狼の血』、②『凶犬の眼』、③『暴虎の牙』の3部作で構成されているから、『孤狼の血 Level 2』と題された本作は、前作の続編である『凶犬の眼』を映画化したもの。私はそう思い込んでいたが、おっと、どっこい。そうではなかった。つまり本作は、『孤狼の血』シリーズの1つという位置づけだが、第2部『凶犬の眼』の映画化ではなく、完全なオリジナル・ストーリーらしい。したがって、本作のメインキャラクターになる上林も、原作にはないオリジナルキャラクターだから、白石和彌監督を中心とする製作スタッフは思い切ったことをしたものだ。

しかし、仮に原作者が「そんなことは許さない!映画化に当たってはあくまで原作に忠実に!」と主張すれば、ひと悶着起きること必至だが、パンフレットにある、原作者・柚月裕子による「小説から受け継いだものが映画として昇華され」では、「今回は、原作にはないオリジナル・ストーリーでしたので、どんな日岡が現れるのか。とにかくワクワクしながら待っていました。」と話しているから、やれやれ。しかし、白石和彌監督はなぜそんな冒険を?それは、『キネマ旬報9月上旬号』の24頁を熟読すればよくわかる。そんな工夫によって、日岡は比場郡城山町の駐在所に飛ばされる前の呉原東署刑事二課の巡査とし

て、上林と対決する本作のラストシークエンスが活きることに。なるほど、なるほど・・・。

■□■悪の化身が猪突猛進！上林の破滅性は？その出自は？■□■

本作のオリジナルキャラクターである上林は、邦画には珍しい“悪の化身”として造形されているうえ、それが生半可ではなく徹底しているので、それに注目！それも『キネマ旬報9月上旬号』（32頁）の「白石和彌、ノワールに懸ける本気度」を読めばよくわかるが、「日本映画の暴力描写は生ぬるい」との反省の上に、韓国ノワールに登場する様々な“悪の化身”を目指したのは大正解。その“目標レベル”は、例えば、『アジョシ』（10年）（『シネマ27』51頁）のチェ・テシク（ウォンビン）、例えば『犯罪都市』（17年）（『シネマ42』268頁）のチャン・チェン（ユン・ゲサン）だ。邦画でも、①園子温監督の『冷たい熱帯魚』（10年）で観た村田幸雄（でんでん）や村田愛子（黒沢あすか）（『シネマ26』172頁）、②白石和彌監督の『凶悪』（13年）で観た木村孝雄（リリー・フランキー）（『シネマ31』195頁）等は、“悪の化身”としての凄みを見せていたが、近時の邦画は彼らの強烈さを喪失していた。しかして、本作の上林は？

それは、出所早々、ピアノ教師・千晶の目の玉をくりぬいて殺してしまう残忍さを見れば明らかだ。これが出所する時に刑務官の神原に対してあんなに丁寧にあいさつをしていた男の仕業？まさか、そんな・・・。誰でもそう思うところだが、彼の“出自”を調べてみると、虐げられた子供時代の父親殺し、母親殺しの残忍さが急浮上！そんな上林にとっては、ただ1人だけ、親と慕っていた五十子正平会長が殺された後の、広島呉原市のヤクザと県警の蜜月状態が許せないのは当然だ。最初は舎弟頭の佐伯昌利（毎熊克哉）ら数名を率いて総勢50名の尾谷組と争ったが、その牙はその後すぐに2代目五十子会や、さらに、仁正会に向かっていくことに。

その迫力はすさまじいし、俳優・鈴木亮平の上林役の役作りは素晴らしい。前述したように、高橋英樹は着流し姿の若き2代目組長姿がよく似合っていたし、鶴田浩二や高倉健の後を継ぐ“正統派任侠モノ”の主人公がよく似合っていたが、高橋英樹と同じように、体格が良くてハンサムな鈴木亮平は、スーツ姿で風を切って闊歩し、ハチャメチャに暴れ回る姿がよく似合う。そのセリフも、前半の「ほんなら殺してくれんね？」はもちろん、後半の「わしゃ必ずそのデカ見つけ出して、地獄見せちやるけえ」も唯一無二の素晴らしさだ。本作では、そんな上林の猪突猛進ぶりを堪能したい。

■□■凸凹コンビの合い性と捜査力は？県警上層部の思惑は？■□■

殺人事件の捜査は必ず2人1組のコンビになるから、興味の1つはそのコンビの組み方。しかして、前作ではハチャメチャ刑事の大上と凸凹コンビを組んだ広島大学出身の“ヒロダイ君”の本作のコンビは、定年間近の警部補・瀬島孝之（中村梅雀）になるから、その凸凹コンビの合い性と捜査力は？漫才で誰と誰が組み、どんなコンビ名をつけるかは芸人の勝手だが、広島県警本部でそんな日岡・瀬島コンビを命じたのは、管理官の嵯峨大輔（滝藤賢一）。嵯峨は“ピアノ教師殺人事件”を捜査するコンビを、なぜ日岡と瀬島にしたの？

その思惑は？

白昼堂々、大勢で家の中に押し入り、レイプを含む残忍な殺し方をした事件なら、犯人はすぐに挙がるはず。近々TVドラマの人気シリーズ『科捜研の女』の劇場版も公開されるが、近時の科学捜査の進展はすごいから、指紋はもちろん、被害者の体内に残された体液などを調べれば、すぐに犯人は挙がるはずだ。私はそう思っていたが、日岡ほどの優秀な刑事でもなかなか上林の逮捕状が取れないから、アレレ。その一因は、五十子会元会長・五十子正平の死亡後、日岡の“闇の仲介”で平穩に収まっていた呉原市のヤクザたちが、上林の登場によってかき回され始め、日岡はその折衝に忙しいことにあるが、原因はそれだけ？ひょっとして、県警の上層部が“ピアノ教師殺人事件”の犯人として上林を挙げることを、何らかの目的で妨害しているのでは？それくらいのことは、日岡の知恵をもってすればすぐにわかるはずだが、なぜ彼はそこに思い至らないの？その一因は、やはり出所後すぐに尾谷組に喧嘩を売ったのに続いて、2代目五十子会会長・角谷洋二にもハチャメチャぶりを示している上林への対策が忙しいため？日岡はそのため、自ら“スパイ”の近田を上林組に派遣したが、そんなチョロい工作で、今や天にも昇る勢いの上林に対処できるの？他方、仁正会に対しては「しばらく我慢してくれ」、「しばらく待ってくれ」の一点張りだが、これでは仁正会を収めることはできないのでは？

本作のオリジナル脚本はよくできているが、上林に関しての欠点は、なぜ、あれほど死んだ五十子正平一筋の生き方が決められるのか、についての説明が不十分なこと。そして、日岡に関しての欠点は、“スパイ”のチンタを巡るストーリーが甘すぎることだ。スタンド「華」が尾谷組の庇護下で生きていることを公言するのなら、日岡はママの真緒との恋仲(?)は極秘にする必要があるし、店への出入りも控えるのが当然。また、本作での日岡とチンタとの連絡の取り方を見ていると、それは“スパイもの”としては小学生レベル。そう思わざるを得ない。大上亡き後、呉原市のヤクザの均衡を一手に取り仕切っていた日岡だったが、上林登場後のこんな難局を、どう乗り切るの？

■□■高坂の登場はサービス過剰？今ドキこんな新聞記者が？■□■

近時の政治の劣化は目に余るものがあるが、それ以上にひどいのがマスコミの劣化。アホバカとまでは言わないまでも、TVのパラエティ番組のレベルの低さは論外だし、ニュース番組でも“見るべきもの”、“聞くべきもの”は少ない。少なくとも、大量のお笑い芸人をコメンテーターとして配置したくないニュース番組は即刻中止してもらいたいものだ。近時は、TVと同じように、新聞や雑誌、週刊誌の記者たちの取材能力の劣化も顕著。“文春砲”だけが時折威勢よく発射されているが、朝日新聞をはじめとする大手新聞の記事は今やありきたりのものばかり・・・？そう思っていると、本作に見る安芸新聞社の記者・高坂隆文(中村獅童)は？

8月24日には、福岡の特定危険指定暴力団である工藤会トップの野村悟総裁に対する死刑判決が下された。各大手新聞記者がこれを一面トップで報道したのは当然だが、各社

はこれまでこの事件や裁判を、どれだけ報道していたの？私が知る限り、その報道はほとんどなかったはずだ。死刑判決が出たのでビックリして各社ともそれを一面に掲載したものの、その分析の不十分さは目を覆うばかりだ。広島県呉原市のヤクザ抗争を大手新聞や安芸新聞がこれまでどのように報道してきたのかは知らないが、今、高坂は何を嗅ぎまわっているの？

中村獅童演じる高坂記者は、一匹狼であることは明らかだが、呉原市で3年前に起きたヤクザ抗争や、その“手打ち”の実態を探る作業がたった1人でできるはずはない。また、高坂はカメラマンも兼ねているが、取材もカメラも記事の執筆もすべて1人でできるはずはない。したがって、安芸新聞の高坂記者の描き方はあまりに現実離れしていると言わざるを得ない。高坂記者が柚月裕子の原作に登場しているのかどうかは知らないが、本作で彼が果たすさまざまな中途半端な役割(?)を見ても、彼を登場させるサービスは過剰だったのでは？また、今ドキ、こんな新聞記者がいるはずないことも明白だ。

■□■ラストのカーチェイスは？両雄の激突は？■□■

重量級の上林に比べると、細身の日岡はミドル級だから、両者が同じ条件でプロレスでもボクシングでも何でもありのルールでリングに上がれば、やっぱり上林の方が強そうだ。しかし、警察とヤクザが激突すれば、組織力と数に置いて警察が勝っているから、両雄が現実の世界で激突すれば、やっぱり日岡の勝ち？私はそう思うのだが、それは日岡が巡査とはいえ、広島県警の組織をバックにしていることが大前提。つまり、あまりに自分勝手な行動をとる日岡が県警の上層部から干されてしまえば、そもそも両雄の激突すら実現しない可能性もある。しかして、現実には警察官である日岡が手錠を掛けられて留置所にぶち込まれてしまうと・・・？

前作の大上以上の“化け物警官”に成長した日岡を象徴するセリフは「口答えしょーんは、全員ブタ箱叩きこんじゃる」。そして、上林の暴力の矛先が、尾谷組から五十子会へ、さらに仁正会まで拡大してくる中で、仁正会が「もはや我慢できねえ」とばかりに反撃に出ようとすると、日岡は実際に「口答えしょーんは、全員ブタ箱叩きこんじゃる」としたが、それはしょせん無理な話・・・？

ヤクザは何事にも見栄が大事だから、幹部が乗る車はベンツに決まっているが、本作では巡査に過ぎない日岡がベンツに乗っていたから、相棒の瀬島はビックリ。そんな日岡のベンツは本作全編にわたって大活躍するのでその動向に注目したいが、本作ラストでは、邦画には珍しいド派手な日岡と上林のカーチェイスが登場するので、それに注目！しかも、この時日岡の手には手錠がかけられたままだから、これでは運転に不利なことは明らかだ。しかして、なぜ日岡はそんな状態で上林の車を追いかけることに？さらに、本作のクライマックスは、両雄の肉弾相撃つ激突になるので、それにも注目！激突した両者の車が吹っ飛んだ後の2人の激突には、拳銃だけでなく日本刀も登場するので、それにも注目！しかして、最後の勝者は？

■□■ 『Level 3』 に向けた伏線は？日岡は今どこに？ ■□■

中国では『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー (戦狼2)』(17年)が大ヒットした(『シネマ41』136頁)が、その戦いの舞台はアフリカだった。それに対して、“孤狼”たちが戦う『孤狼の血』の舞台は広島県の呉原市。井上靖の小説『蒼き狼』(59年)の主人公は若き日のチンギス・ハンだったが、いつの時代でもどこの国でも、“狼”の生き方は興味深い。前作で志半ばで亡くなった(?)大上刑事が日岡に残したライターは、毎日愛用されていることがスクリーン上で再三表現されるが、その図柄は狼だ。しかして、本作のストーリーが終結した後、今は広島県警を離れ、比場郡城山町の駐在所に1人で赴任している日岡の姿が登場するので、それに注目！

ヤクザの勢力均衡の維持という大テーマに日夜頭を悩ませていた広島県警巡査時代に比べると、いわゆる“村の駐在さん”に転身した今の日岡は表情も穏やかだ。そんな田舎村にはもちろんヤクザはいないし、上林が起こしたような残忍な殺人事件など起きるはずもない。それに代わって、そこでは村人から「狼が出没して困っている」との申立てが……。それに対して日岡は、「ニホンオオカミはすでに絶滅しているよ」と説明したが、ある日、村を挙げての“狼狩り”に出動してみると……。?ふと何かの声を聞いたと感じ、ふと何かの姿を見たと感じた日岡が1人、隊列を離れて山の上に踏み込んでみると……。

柚月裕子の原作をここまで格調高い映画に作り上げた『孤狼の血』シリーズだから、そんなストーリーで始まるであろう『Level 3』にも大いに期待したい。

2021 (令和3) 年8月25日記